

右の写真は直径50cmほどの舵輪のレプリカ。「S.S. SAN JUAN PIONEER号」は長さ250m、幅40m、約10万トン。ペルシア湾～南米～ヨーロッパと航海していた。船内にプールや卓球場もあったことを中野さんは記憶している。



## Profile

なかの かおり

エッセイスト、服飾史家。1962年生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得後、英国ケンブリッジ大学客員研究員を経て文筆業に。服飾史、ダンディズム研究で雑誌寄稿など活躍中。近著に「愛されるモード」(中央公論新社)、「ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち」(新潮社)など。

## IN MY ROOM

### 私の部屋のいちばん美しいもの

vol.42

photo by Takeharu Hioki

# 舵輪

中野香織

## 子

供のころ、父はアメリカの商船に乗っていました。会えるのは年に数回。神戸や横浜、長崎などに船が寄港したときだけです。

そんなときは、学校をわざわざ休んで、船まで面会に行くのですね。学校を休んで旅行できただけでなく、船に乗ればそこはアメリカ。分厚いベーコンや濃厚なチーズ、当時まだ珍しかったハーシーのキスチョコなんかがふんだんに食べられて、異国の香りと機関室の独特のオイルのにおいにわくわくしていました。船にはプールもあるし、面会期間は別世界の興奮を味わっていました。

そんな楽しみも、小学校2年生まで。世界各地に行くことができず。船乗りは父の念願の職業だったらしいのですが、「やはり父親は子供たちと一緒に過ごさなくてはいいかん」と思うに至り、「陸に上がる」一大決心をしたそうです。

今でも、家の中には、アメリカ商船時代に父が集めてきたエキゾチックなものがごろごろと飾つてあります。オランダの木靴やらフランス人形やらポルトガルの置物や南洋の木彫り人形やら仮面やら。

写真の「舵輪」はそのなかでも別格扱いでもっとも目立つ場所に飾つ

てあります。S.S.サンファン・パイオニア号という船の、舵輪のレプリカです。

たまに訪れる子供にとって船はエキサイティングな場所ですが、乗組員たちにとっては、航海中の船の上ではだいたい「ひま」なんだとか。父の同僚が、その時間を使つて作り上げた一点ものが、ほかからぬこの木彫りの舵輪です。

サンファン・パイオニア号ってどんな船だったのかと調べてみたら、昭和41年当時の写真がでてきました。舵輪と同じ船の名が書かれた浮き輪の中央から、4歳の私と2歳の弟が顔を出している。一緒に写っている父は30歳ちょうどです。この子供たちが父に長年の夢だった職業をあきらめさせたのか……と思うと、複雑な思いもいたします。「年とつて続けられるような仕事じゃないから、ちよつと辞めどきだった」と父はうそぶきますが、夢より子供を優先することがどんなに難しいか、それゆえ子供にどんなに大きな影響を与えるか、自分の子供をもつてみて、初めてわかります。

この舵輪が思い起こさせてくれるのは、非日常的な船上で過ごした夢のような時間と、何よりも家族の絆。航路に迷ったときに、大切なものを思い出させてくれます。